

平成22年 5月27日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520186

研究課題名（和文）19世紀のドイツ語の歴史記述と物語り記述の比較分析研究

研究課題名（英文）Comparative Research on the Relationship between Historiography and Literature, Emerging from the Contexts of the History of Thought since the 19th Century

研究代表者

SCHMITZ BRIGITTE (SCHMITZ BRIGITTE)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10431488

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀ドイツ語圏における代表的な歴史研究であるヤーコプ・ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』の校訂版編集作業チームによる共同研究であり、文献学的調査に基づいてブルクハルトの歴史記述の独自性を解明すると同時に、それが文学や思想に対して及ぼした影響について、特にシールズフィールド、ムージル、トーマス・マンなどドイツ語圏作家の物語り表現との関連に焦点をあてつつ、明らかにした。

研究成果の概要（英文）： This research has been carried out by three scholars, who have for several years committed themselves to the philological work of making a critical edition of Jacob Burckhardt's *The Civilization of the Renaissance in Italy*. Based on this continuing project, some important characteristics of Burckhardt's style, which represented the historiography and historical thought of 19th century, are elucidated. And besides it has been investigated from various aspects, what kind of relationships exist between such a style of the description of history and the fictitious narrative of the texts of German literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ系文学

キーワード：ドイツ文学，歴史記述，物語り，ブルクハルト

1. 研究開始当初の背景

この研究は、三名の研究者からなるチームにより、2007年4月に開始された。研究代表者は当初、原研二であったが、2008年9月に原が死去したため、研究代表者はブリギッテ・シュミッツに引き継がれた。沼田裕之はいまひとりの構成員である。

本補助金研究は、これが始まる以前から行われていた幾つかの学術的活動と連動し、それを発展させるものである。それらに関して簡単に述べる。

研究活動のひとつの焦点は、ヤーコプ・ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』（初版1860年。以下、『文化』と略記する）の校訂版編集作業である。これは、スイスのバーゼルに本拠を置くブルクハルト財団によって刊行中の新批判版全集（以下、バーゼル版と略記）第4巻にあたる。この作業は、1990年代以来、主にマインツ大学のアンドレアス・チェザーナ教授（Anreas Cesana）によって進められてきた。バーゼル版の編集を主導し、かつこの国際的プロジェクトの一部を東北大学の研究チームに提供したことは、チェザーナの功績のひとつであり、その発端は1990年代の末にまで遡ることができる。

本補助金研究着手の前年、原と沼田は、バーゼルで開催されたブルクハルト研究に関する国際会議（2006年9月）でそれぞれ報告を行っている。ブルクハルト研究と東北大学研究チームとの関係は、さらに歴史的な背景を有している。1936年から41年にかけて、ユダヤ人として日本に亡命してきた哲学者カール・レーヴィットは、東北大学文学部で教鞭を執ったが、ブルクハルトはまさに彼によって初めて日本に紹介されたのである。また『イタリア・ルネサンスの文化』が、1960年代に東北大学文学部教授柴田治三郎（ドイツ文学）の手で日本語に翻訳されたことも、記憶に値する前史のひとつである。

バーゼル版全集の編集作業において、原と沼田は『文化』の文献学的調査・校訂にあたり、シュミッツはそれをドイツ語母語話者およびドイツ文学研究者の立場から補助してきた。

研究代表者をつとめた原とシュミッツは、東北大学文学研究科ドイツ文学研究室の教員として、ドイツ語圏文学の研究を行ってきた。原は、わが国におけるオーストリア文学研究を代表する研究者のひとりであり、平成15年から17年にかけて、『オーストリア小説を中心とする20世紀ドイツ語散文の言説分析』を研究課題として科学研究補助金（基盤研究(C)）を受給し、平成18年に研究成果報告書を提出している。また、『オーストリア文学小百科』（水声社、平成16年）の編者をつとめるかたわら、自らの研究成果を著書『物語と不在——十九世紀オーストリア小説とムージル』（東洋出版、平成17年）にまとめるなど、精力的に学術的活動を進めてきた。原は、2008年9月、惜しまれながら病没したが、上記のバーゼル版編集作業を主導しつつ、これを広くドイツ語圏文学研究とリンクさせるという構想のもと、本補助金研究をスタートさせたのは、ひとえに原の功績である。

2. 研究の目的

(1) バーゼル版の校訂編集作業においては、ブルクハルトが参照した文献の原著を正確に突きとめ、彼が論じている様々な問題について新しい解釈ならびにコンメンタールを施すことが試みられている。これによって研究上の利便性が高まるだけでなく、関心を持つ一般読者にとってもブルクハルトの著作がより近づきやすいものとなるはずである。本補助金研究は、こうした文献学的研究をさらに推し進めることで、ブルクハルトが自らの歴史記述様式を確立していった過程を明らかにすると同時に、19世紀における歴史記述さらには歴史的思考その

ものを代表するとも言える彼の学問の特質を解明しようとするものである。

(2) 研究代表者をつとめた原およびシュミッツは、ドイツ語圏文学の専門家であり、19・20世紀の小説に精通している。物語り文学の描かれ方と歴史記述との間には深い関係があり、現実の歴史的出来事をテーマとする小説も多い。ブルクハルト自身、文学から影響を受けていると同時に、『文化』で示された歴史記述の方法は、歴史学の枠を越えて文学作品にも影響を及ぼしている。ドイツ語圏文学における歴史記述と物語り表現との関連を解明することが、本補助金研究のもうひとつの重要な目的である。

3. 研究の方法

(1) 本研究の文献学的前提となるブルクハルト『文化』の研究に関しては、補助金研究以前の作業を継続する形で、以下のような調査・研究が行われた。つまり、引用箇所の詳細な検証によって、執筆にあたってブルクハルトが参照した著作をリストアップすること、しかも当時利用可能であった版まで特定することである。使用された文献の多くはスイス、特にバーゼルとチューリヒに存在しており、チームのメンバーは、実際に現地でブルクハルトが手にしたであろう書籍の該当箇所をチェックした。もうひとつの課題は、ブルクハルトの手稿そのものと、そこに残された書き込みを調査することであった。沼田はこの方面のスペシャリストである。原は、校訂版作成のため、調査結果を集約し、必要なリストを整備する作業にあたった。シュミッツは、成果が論文その他にまとめられる際に、原語をチェックし、文体的な面の改善に寄与した。

(2) 上記の研究を前提として、本補助金研究のさらなる課題を遂行するため、原は、19世紀から20世紀にかけて書かれた様々なドイツ語圏文学の作品を取り上げ、ブルクハルトにおいて成立した歴史記述の方法との関連を比較検討した。シュミッツは、自らの専門であるトーマス・マンの作品に

おける物語り的な歴史表現を分析し、現実の歴史と文学との関わりを探究した。沼田は、特に日本におけるブルクハルトの受容を思想史的方法によって検討した。これらの研究は、文学研究や歴史学のみならず、哲学・心理学・自然科学など他分野の研究成果を参照しつつ進められた。

(3) 研究の国際的な促進のため、ドイツおよびスイスにおいて調査を行うと同時に、関連する国際会議に参加して海外の研究者との意見交換を行った。また研究代表者であるシュミッツは、東北大学において定期的な研究会を開催し、文学における歴史的テーマの扱いについて継続的な研究活動を展開した。

4. 研究成果

(1) 上記のように、本補助金研究は、「文献学的調査」と「物語りと歴史の言説の研究」という二つの柱からなる。まず前者の「文献学的調査」に関して述べる。原は、『イタリア・ルネサンスの文化』に登場する「人名」を精査しリストアップした。シュミッツは、マールバッハ（ドイツ連邦共和国）の文書館を中心に、文学作品と歴史記述に関連する資料を、数次にわたって調査した。沼田は、マインツ、バーゼル等において、ブルクハルトを中心にルネサンス関係の原資料の徹底的な調査を行い、『文化』の引用に使われたオリジナル文献の大半を突き止めた。具体的な成果の例を挙げれば、沼田は、バーゼル大学図書館でブルクハルトの手稿を調査する過程で、手稿に挟まれた、ないし貼り付けられたメモを発見した。このメモにブルクハルト自身が書いていた内容から、『文化』本文の記述にこめられた重層的な意義が明らかとなった。

本研究を通じて、現在普及しているドイツ語版の『文化』では、ブルクハルトの意図が必ずしも正確に反映されていない場合のあることが明らかとなった。上記のような文献学的調査や精密なテキスト読解は、ブルクハルトの歴史記述の真の独自性を浮き彫りにするものである。その成果は、本

補助金研究推進のための前提となるばかりでなく、将来この分野を研究しようとする者にとって、精確な研究の基礎を提供するものである。

(2) 本補助金研究の主要課題である「歴史記述と物語り記述の比較分析研究」に関しては、以下のような取り組みのもと、種々の成果が得られた。

当初の研究代表者である原は、『イタリア・ルネサンスの文化』には、独創的な「語り口」を重視する歴史の見方が強く示されていることを、文献学的調査を踏まえて確認し、その上で、この「試論」としての性格が、20世紀のミュージルやアドルノの「エッセー」概念に通じるものであることをテキストの比較検討を通じて明らかにした。「客観的」な歴史的事実があつて、それを「客観的」に記述することが歴史学である、という考え方は今や通用しない。歴史は多かれ少なかれ「物語り」としてしか存在しえない。この今日一般的に認められる歴史観を19世紀に鮮明に述べているのが、ブルクハルトなのである。『文化』の「試論」的性格に関する研究は、ドイツ語で書かれた原の論文『イタリア・ルネサンスの文化』の試論的構想：欄外書き込みと内容概説の比較に基づく解釈（«Unerschöpflichkeit der Quellen». Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt, Schwabe, 2007, 所収）で発表された。原はまた、時代的にはブルクハルトに先立つ19世紀スイスの歴史小説家チャールズ・シールズフィールド（カール・アントン・ポストル）の作品『南と北』を分析することで、物語り言説の分野でも、ラカンの精神分析に通じる革新的なテキストが19世紀前半にすでに書かれていたことを示した。

研究分担者である沼田は、ブルクハルトが現代日本においてどのように受容されているかを実証的に検証し、この歴史家が現代日本において持つ意義を明らかにした。沼田もまたこの研究をドイツ語論文として発表し、ブルクハルトの受容と研究における日本の貢献について、貴重な国際的情報発信を行った。

原の没後、研究代表者となったシュミッツは、自らの専門であるトーマス・マン文学研究の視点から、まずブルクハルトとマンとの直接的な関連について、イタリア・ルネサンス時代を描いた戯曲『フィオレンツァ』を取り上げて検討した。その際シュミッツは、ブルクハルトとマンの両者に共通して見られる性質、つまりヨーロッパ思想と個人主義的性格が発展する過程におけるある特殊な傾向に焦点をあてた。

シュミッツはさらに、トーマス・マンの作品を対象として、物語り化された歴史の問題を探究した。具体的には、まず、ナチス・ドイツによるホロコーストに関するマンの態度について、物語り表現の分析を通じて新たな光をあてた。従来、マンを含む同時代の知識人はナチスの反ユダヤ的犯罪について十分な知識を持ち得ず、それゆえユダヤ人に対するマンの態度は曖昧であったというのが通説である。シュミッツは、幾つかの作品と同時に、日記・エッセイ・ラジオ講演など多様なテキストの分析を通じて、こうした通説への反論を試みた。その議論は、文学的、あるいは広く美的テキスト一般に現れる反ユダヤ主義という現象、つまりマーク・ゲルバーの言う「文学的反ユダヤ主義」をいかに分析するかという問題への重要な寄与をなしている。

シュミッツはまた、トーマス・マンの『ファウスト博士』（1947年）に描かれた「悪」のモチーフを取り上げ、物語り表現と歴史記述との関連を探究している。というのも、この作品に描かれる悪の、あるいは「悪魔的」な力は、多かれ少なかれファシズムの雰囲気を反映するものだからである。シュミッツは、作中における実際の歴史的事件への言及と、例えば「地獄」のような間接的な「解釈学的トポス」表現を、並行して分析することで、マンはホロコーストの罪悪というテーマを無視してきたという従来の見解に異論を唱えている。これはトーマス・マン研究に新たな論点を提示するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①Schmitz Brigitte, Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil III), The Annual Reports of Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University, 査読無, 58 巻, 2008, pp. 37-50

②Schmitz Brigitte, Erscheinungsformen des „Dämonischen“ im Werk von Thomas Mann – vornehmlich dargestellt am Beispiel des *Doktor Faustus* –, Neue Beiträge zur Germanistik, 査読有, 7 巻, 2008, pp. 40-61

③Schmitz Brigitte, Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil II), The Annual Reports of Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University, 査読無, 57 巻, 2007, pp. 30-48

[学会発表] (計 1 件)

①沼田 裕之, フランスの「労働教育」観へのルソーの示唆, 第 26 回フランス教育学会, 平成 20 年 9 月 20 日, 中央大学

[図書] (計 6 件)

①Hara Kenji, Offenheit und Ambivalenz. Dichterische Modellierung von Geschichte und Politik bei Goethe, Sealsfield, Musil und Burckhardt, Peter Lang (Bern), 2010, pp.1-250

②Numata Hiroyuki, in: *Liberté, inégalité, individualité. La France et le Japon au miroir de l'éducation*, ed. by Jean-François Sabouret and Daisuke Sonoyama, CNRS Éditions (Paris), 2008, pp.261-271: „Différences culturelles entre le Japon et la France“

③Hara Kenji, in: *Charles Sealsfield im Schweizer Exil 1831-1864. Republikanisches Refugium und internationale Literatenkarriere*, ed. by Alexander Ritter,

Edition Praesens (Wien), 2008, pp.205-225: „Name des Vaters. Eine Analyse der Machtverhältnisse in Charles Sealsfields Roman *Süden und Norden*“

④Hara Kenji, in: «Unerschöpflichkeit der Quellen». Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt, ed. by Urs Breitenstein, et al., Schwabe (Basel), 2007, pp.75-85: „Die essayistische Konzeption der *Cultur der Renaissance in Italien*: Deutungen aus dem Vergleich der Marginalien mit der Inhaltsübersicht“

⑤Numata Hiroyuki, in: «Unerschöpflichkeit der Quellen». Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt, ed. by Urs Breitenstein, et al., Schwabe (Basel), 2007, pp. 181-198: „Burckhardt und Japan. Eine Weiterführung“

⑥Schmitz Brigitte, in: «Unerschöpflichkeit der Quellen». Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt, ed. by Urs Breitenstein, et al., Schwabe (Basel), 2007, pp. 235-250: „Die Spuren Jacob Burckhardts in Thomas Manns Werk – vornehmlich in seinem Renaissancedrama *Fiorenza*“

6. 研究組織

(1)研究代表者

SCHMITZ BRIGITTE (SCHMITZ BRIGITTE)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10431488

(平成 20 年 10 月 23 日, 原 研二より研究代表者の交替)

(2)研究分担者

沼田 裕之 (NUMATA HIROYUKI)

東北大学・大学院教育学研究科・名誉教授
研究者番号：80050269

原 研二 (HARA KENJI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：60114120

(平成 20 年 9 月 28 日死去)